

特集・宮崎会員の隨想「忘れ得ぬ労使の人々」第18話

「生真面目で正義感にあふれる人柄」 高木剛 連合会長・日本生産性本部副会長

労働組合の組織は以前ほどではないにせよ、外部の人間には判りにくいところがある。

イデオロギー、組織や人間のネットワーク、建前と本音の見極めなど、知らないでうっかり踏み込んだり、踏み外したりすると物事がこじれる。

これまで経営教育事業を所管していた私に労働本部長の辞令が突然発令された。本人にとっては寝耳に水、青天のへきれきであった。それは別世界へ行けという等しい人事である。

労使関係問題は生産性運動にとって重要な柱の一つだが、山積している課題に対応していくには勉強不足が否めず、労組の難しい人間関係やイデオロギーに基づく組織のあり様など、これまで接近する機会もなく戸惑うばかりであった。

日本の労使関係は、急成長を続ける経済の恩恵を受けて変貌を遂げつつある。ゆとり豊かさの時代へそして押し寄せてくる国際化の波、若年層の価値観の変化など大きな曲がり角を迎えていた時代である。そこで異分野の経験を積んだ人間を労使関係部門へと配属したのであろうことは想像にかたくない。配転に慌てふためいて、以前から目をかけていた労働界の大御所、滝田実氏に悩みを打ち明けた。

滝田さんは深刻になるな、勉強すればいいと手取り足取りの個人教授を引き受けてくれた。

ある時、市ヶ谷のゼンセン同盟の本部へ供を仰せつかった。訳も分からずついていくとすでに面識を得た芦田会長の部屋には立ち寄らず、隣の書記長室へ伴われ紹介されたのが高木剛氏であった。

高木さんは太い黒縁の眼鏡をかけ寡黙ではあるが、笑いながら「労使関係は難しい仕事で問題点も沢山ありますがやりがいのある分野です頑張ってください」と目元を緩めた。

ゼンセン同盟の山田清吾、芦田甚之助、滝田実のそうそたる諸氏は、いずれも饒舌で人をそらさない方々であるが、高木さんはどちらかというと寡黙の人である。



左高木剛第5代連合会長

高木さんは余程のことがない限り口から火を噴かない。生産性本部の委員会でできる学識者が、物事が進まないのは労組が頑迷であると発言した。

するとすかさず高木さんは「働く組合員の苦労や実情も判らずに感覚で労組を誹謗中傷するな」と舌鋒鋭く反論し、理路整然とした論陣を張って居並ぶ日本のオピニオン・リーダーたちを額かせたのである。

高木さんは東大野球部のキャッチャーとして鳴らした。

口の悪いさる経営者が高木さんの後姿を見ながら「彼の尻をみろよ、あれはキャッチャーのケツだよ」と陰口を囁いたのを耳にしたことがある。

高木さんは組合員七百万人を傘下に置く、労働組合の総本山である連合（日本労働組合総連合会）の第5代会長に推挙され、時の総理とも堂々渡り合う論客として大いなる活動をみせた。

生産性運動に対しても（財）日本生産性本部の労組代表の副会長として経営側の理事諸侯と時には激し

く議論をし、労組の立場を論じ貫き通すなどその存在感を見せつけた。

余談であるが、ある時期生産性本部の管理職研修会で「これから生産性運動は時代の変化と共に変えいかねばならない。今後は新しい概念を“高質生産性”と名付け運動を深化させねばならない」とする役員が告げた。これを受け一同は喧々諤々の議論をした。

生産性本部設立以来運動の柱として掲げてきた三原則（1労使の協力協議、2雇用の安定拡充、3生産性の成果の公正分配）は、今日の時代にマッチせずもはや時代遅れで古い、替えるべきだと役員が説いた。管理職にある一同は賛意をあらわし頷いた。

だが私一人が運動の三原則は生産性本部の原点で、時代とともに変わっていくものではない。千年前の経文を時代変遷とともに変えてきたか否である。高質生産性という文言自体、説明を受けなければ運動を推進している幹部の集まりであるこここの場で議論になるほど判りにくい。

外部にむけてどう説明するのか？誰も黙して語らない孤立無援の中声高に意見を述べた。

この管理職研修を計画した役員は満座の中で「宮崎君！あんたは生産性を本当にわかっていない！」と切り捨てた。むらむらと怒りが湧いたが同僚に袖を引っ張られ黙した。

そして生産性運動の広報紙である生産性新聞からも三原則の文字がいつの間にか消えた。

それからしばらくして同僚が「高木副会長が理事会の場で、生産性運動の三原則こそ運動の原点である。ないがしろにしてはならないと強く主張された」と耳打ちしてくれた。

そしていつの間にか局内を熱病のように駆け巡った訳の判らない「高質生産性」は次第に忘れ去られ三原則が復活したのである。

この時わが意を得たり応とばかりに高木副会長のところへ飛んでいきたい気持であったが、かろうじて自制した。

管理者研修を取り仕切り、私を罵倒した役員の感覚的な議論では高木さんの倫理的で、聞く人を納得させてしまう論争には到底かなうはずもないと、わが上司のふがいなさを一方では嘆いたものである。



左高木剛氏中央野並豊崎陽軒会長

高木さんは出るとこへ出、いうべき時には烈火のごとく火を噴くが普段は生真面目でどちらかというと寡黙な紳士で人の話を黙ってニコニコしながら聞く度量を持った方である。

誰に対してもその姿勢は変わらない。体格もよくタフな感じだが人に威圧感は与えず、頼り甲斐のある大親分の風格を滲ませている。しかし一端口を開くと理路整然自身の考えていることを述べる。

反論は筋が通っていればうなづいてくれるが、事実に基づかない議論は鋭く喝破する。いつも愛用している黒縁メガネは高木

さんのトレードマークであるが、議論している時の目は雑談している時の柔軟な目とは違って相手を射すくめるような光を放っている。

さまざまな場面で高木さんと出会う機会があるが、「おう！元気でやっていますか頑張ってください」といつも柔軟な表情で声をかける気づかいを見てくれる。

連合の第5代会長を退き、労働組合活動の発祥の地である歴史的に由緒ある友愛会館での懇親会に久しぶりに出席した。高木さんは足が不自由となり車いすに座ったまま最前列におられた。

多分遠くから姿を見たのだろうか見知らぬ人に肩をたたかれ高木会長が呼んでいますと告げられ座って

いる高木さんに挨拶をした。

「久しぶりですね。生産性本部を退いて今は何をしていますか・・・」と問われ、四方山話になった。気が付くと高木さんに挨拶する人が何人か後ろに並んだので辞した。



日本労働ペンクラブ会員と左5人目来賓の高木剛連合会長

2015年高木さんは長年わが国に尽くしてきた功労を認められ旭日大授章を叙勲された。

千人におよぶ各界のリーダーたちが祝いに駆けつけた。私も会場の片隅から心から濁りの無い正義感溢れる高木さんに拍手を送った。



叙勲のお祝い高木夫妻

宴たけなわの頃高木さんと目があった。目を細めて手招きされ傍によると奥様を紹介された。祝いの言葉を述べ出席者の顔ぶれを見て改めて高木さんは人望のある大物だと感じたものである。

余談であるある会合で知り合いのジャーナリストに高木さんの叙勲の祝いのパーティーがあったが、あなたは呼ばれたそうだが、私を呼んでくれなかったといつて、まるで私が人選をしたかのような絡み方をしてきて閉口した。

私は下戸である。友人から聞いた話だが高木さんは“はしご”と綽名されたように酒が好きであったようだ。

蛇足だが連合の初代事務局長は高木さんと同じゼンセン同盟出身の山田清吾さんであるが、新宿に行きつけのB A R あってそこ以外にはあまり行かないと聞いている。人さまざまである。

高木さんに面識を得て間もなくの頃「酒は強いですか？」と尋ねられたことがあった。「奈良漬を食べても酔う質です」と応えた事があった。これが原因かどうか判らぬが、振り返ると意外にも長く厚誼を頂きながら一度も酒の席に誘われたことがないことに気づいた。実は酒は飲めないが宴席が大好きなことを伝え忘れていたのである。後悔先に立たず残念であった。

つい先日亡くなるまで生産性新聞に「徒然なれど薑桂之性は止まず」と題し22回にわたり論文が連載



連合初代事務局長山田清吾氏

された。労働運動を通し培ってきた豊かな経験に基づき、世情を分析し平素考ておられる日本のありようを主題にした連載である。拝読しながら労組の未来、生産性運動に対する真摯な思い入れを強く感じたものである。

高木さんが亡くなったと知人が連絡をくれた。あの連載はどうなるのかと思っていたが原稿を事前に頂いていたため、亡くなられてからも22回まで掲載された。

高木さんは自ら称するように、畫桂之性（きょうけいのせい＝宋代の熟語）年を経てもなお生真面目で、生涯を労働組合に捧げ燃え尽きた方であったと思う。2024年9月に高木さんが黄泉の国へ旅立ってからはや半年が過ぎた。